

Kuivasjärvi Daycare Centre 訪問

こうま幼稚園 学年主任 小久保 裕貴妃

1 はじめに

私立学校教員海外研修団は、2025年9月8日、視察先であるクイヴァスヤルヴィデイケアセンターを訪問した。幼稚園の周囲には多くの森林や湖が広がっており、街全体が自然豊かな環境に包まれていた。また、氷点下であっても毎日外気浴の時間を大切にしており、乳児でも屋外で寝かせる習慣があるという話はフィンランドならではの特徴だ。

今回の視察では、教育環境の設定、使っている教材、ウェルビーイング向上に向けた取り組み、また、日本の教育環境との違いを知ると共に、自国の教育現場に還元できることがあるのか、深掘りしていきたい。

2 学校概要・施設概要

市が運営する公立の幼児教育施設であり、保育と教育が一体化している。ポジティブな全日保育を行っており、保育時間は午前6時から午後6時までである。対象年齢は0歳から6歳であり、プレスクールでは就学に向けた6歳児対象の教育も行われている。

今回の視察では、園長先生のクラスについてもお話をうかがった。そこでは法律に基づき、クラス全体（21名）が小集団のグループ（7名×3グループ、教師各1名）に分けられている。教師の人数が多く、手厚いサポート体制が整っているため、個々と向き合う時間を十分に確保できる。園舎図は特徴的な形をしており、隣の教室との間隔はほとんどない。小さな教室同士の仕切りを解放することで、広い教室として使用したり、小集団同士をユニット化したりと、場面によって使い方を変えている。また、図書館が併設されており、読書の機会も多い。



ほとんど長廊下がない園舎図

3 教育環境

毎日のひと時ひと時を学習の場と捉えており、自然を用いた探求活動が生活の一部となっている。時にはオウル大学の化学学部や医学生と連携を図り、学生が考えた遊びや活動も行っている。以下、具体的な活動例である。

- ・化学学部提案→主に STEAM 教育を取り入れた活動。雪が水や氷に変化する様子を観察したり、雪に色付けをしたり、子どもの興味や好奇心を引き出す活動が多い。

- ・医学生提案→「クマちゃんの病院」と名付け、子どもたちが病院を怖がらないよう考えられた取り組みである。学生側も子どものリアクションなどを研究対象としている。

教室のカーペットやカフェテリアのテーブルには、一人ひとりの好きなマークが貼られており、居場所を提示または自己選択できるようになっている。文字が読めない子でも、自分のマークを見て行動できるような工夫が施されており、このような視覚化が、子どもたちの主体性や自分で考える力を養っている。教師も積極的に遊びに参加し、順番を待つなど思いやりの気持ちを育んだり、個々を観察しながらアイディアを与えていたり、喧嘩が始まりそうな場面ではアドバイスを加えたりとサポートしている。重要なことは、常に教師が子どもたちのロールモデルであることだ。教室の一角にはカーテンで仕切ることができる小さなスペースがあり、主に小集団で活動するときに使用している。狭い空間があることで子どもたちが集中して遊び込むことができるそうだ。

クラス全員で活動する時間は毎日およそ10分と短く、日付や出欠確認程度。なぜなら、集団活動よりも遊びを通した学びを重要視しているためである。行事や集団活動が多い日本の教育スタイルとは、大きく異なっていた。

4 教材の視覚化

(1)自律性と主体性を養う

教室の壁には、教師と子どもたちが考えたクラスのルールが掲示されていた。学期の初めに、「守れる」という前提で考えられたものであり、日々ルールに従って行動できるよう指導している。具体的な内容として、「遊んだ後はおもちゃを元の場所に戻す」、「列の順番を待つ」、「友達のおもちゃを許可なく取らない」などと示されていた。周りのパズル部分には、“ルールに従う契約”として個々のサインも書かれていた。



学期初めに子どもたちと考えたルール

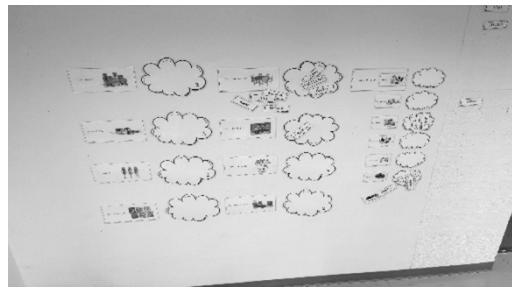
(2)信号カードを活用した指導

3色に分けられた信号カードを教師全員が首から下げていた。具体的な使用場面として、「緑は褒めるとき」、「黄は少し注意が必要なとき」、「赤はルールに反したとき」に活用している。視覚的に訴えるカードを用いることで、子どもたちは、物事の良し悪しを理解し、意識的に自分の行動を見直すことができる。何度も赤が出てしまった場合は、「なぜ赤が出たのか、緑にするにはどうしたらよいか」を子どもたちに問い合わせ、教師も共に改善策を考えている。その過程で素直に受け入れられない子どもがいた場合は、その姿も一つの自己表現としてポジティブに受け止め、加えて、適切な表現方法についても指導している。

他にも多数の絵カードを用いて教育しており、コミュニケーションサポートやイメージサポートには欠かせない。

(3) 選択の自由・絵カードの多様化

好きな遊びを選択できるよう表が貼られており、遊びの絵の横には、自分の名前（低年齢児はまだ文字が読めないため、自分の顔写真）を貼るスペースもあった。遊びにより人数制限があるため、満遍なく様々な遊びを選択し、多くの友達と関わることができるように配慮されていた。子どもたちが遊びを変更したり、部屋を離れたりする場合も、自分で名前（顔写真）を貼りかえる仕組みになっており、教師は「誰が」、「どこで」、「どのくらいの時間」、「何の遊びに参加しているか」を一目で把握することができ、成長の確認にも役立っている。人数制限に達してしまった場合は、教師がサポートに入るが、誰一人孤立した状態で遊ばないように見守っている。また、一人で遊びたい場合でも、常に大人の存在を感じができるような環境づくりを徹底している。



自分で考えながら遊びを選択

5 ウェルビーイングの向上

(1) 子どもの様子

否定せず、肯定することを徹底したポジティブ教育の成果もあり、子どもたちは状況を把握しながら行動している印象であった。特に、自己表現が難しい場合でも、感情や意見を尊重してもらえることで、個々の主体性やウェルビーイングの向上に繋がっている。具体的な例として、恥ずかしがり屋な子に対しては、親指を上げるなど、動作で表現する選択肢を与えたり、小集団をさらに小さなグループにしたりと、表現しやすい環境へと移行している。同時に、強制されない環境が子どもたちの安心感や信頼感に繋がっている。また、広大な自然を活かした森林散歩や、スキー、スケートなどのアクティビティも豊富に取り入れられており、時間に追われることなく伸び伸びと過ごせる環境が子どもたちの幸福度をさらに高めている。

(2) 教師同士の連携

オウル市では、2022年に作成された幼児教育（ECEC）というカリキュラムがあり、これに沿って教育が行われている。この土台を基に教師同士が協力しながら、個々やグループ、クラスに応じた目標を考えている。個人の目標作成においては、子どもが「何かしなければいけない」というものではなく、教師がどのような教材を使用し、どのような働き掛けでサポートを行えば成長に繋がるのか、などを重要視している。したがって、どちらかといえば教師に対する目標である。

教師は、日常的に教育や子どもたちの発達状況について意見交換を行っているため、教育観の相違はほとんど見られない。さらに、幼児教育の課題について尋ねたところ、「全て解決している」と自信を持って答えており、普段から課題解決に向けて積極的に話し合っている様子がうかがえた。加えて、ネウボラとの連携も密に行われており、子どもの状態に応じて心理的・専門的なサポートが必要な場合には、円滑に相談できる環境も確保されている。

(3) 教師の働きやすさ

教師の人数が十分に確保されていることで、仕事に関する責任や役割が分担されている点はたいへん魅力的である。また、身体的負担がかからないよう、子どもたちの椅子やおむつ替えのスペースは、全体的に高い位置に設定されていた。これらは国や自治体からのサポートによって成り立っており、福祉国家フィンランドの特徴である。さらに、園内の掃除はほとんど業者が担当しており、その分、教師は教育に専念することができる。教師のゆとりある日常が園全体のウェルビーイングに繋がっていた。

6 おわりに

イントロダクションを聞いている私たちの周りでは、数名の園児が遊んでいたが、状況を察知したのか、物音を立てないよう静かに教室を出入りする姿も見られた。なぜここまで落ち着いて行動できるのか不思議に思ったが、視察を通して子どもたちの社会性は、教師の充実したサポートや環境設定により育まれてきたものであると理解した。

また、活動や遊びの中では子どもが主体であり、教師はサポート役にまわることが多い。自主的に考えて行動する機会が多いフィンランドでは、一人ひとりが自律している印象であり、落ち着いた環境の中で学びが展開されていた。今回の研修では、「遊びが一番の学習である」という学びを得たため、まずは自園でも探求活動を積極的に取り入れていきたいと考えている。

最後に、「世界幸福度ランキング8年連続第1位」であるフィンランドの教育を身近に感じることができ、自身のウェルビーイングも高まった。